

# Optics & Photonics Japan 2006 開催報告

## Optics & Photonics Japan 2006 推進委員会

立野公男・志村 努・伊藤雅英・沖野晃俊  
 笹木敬司・本宮佳典・永野繁憲

日本光学会年次学術講演会は、第15回目を迎え、量とともに質の向上も期し、隣接学会に対する自らのコアコンピタンスは一体何かを皆で議論し合う場の提供を念頭に、「“光のシナジー”を求めて—隣接学会・隣接国との協調と競争—」をスローガンに掲げて会の運営に臨んだ。そのために、まず名称を実態に即して Optics & Photonics Japan 2006 (OPJ 2006) と新たにし、(社)日本分光学会と初めての共催で、2006年11月8日(水)~11月10日(金)の3日間にわたり、昨年と同じ東京都千代田区一ツ橋の学術総合センター(一橋記念講堂)にて開催された。昨年、一部の会場で過度の混雑となった反省を踏まえ、今回は会場面積を広くとって収容人員を増やした。そのため、多数の講演(招待講演71件、一般口頭講演148件)があったが、各会場とも落ち着いて聴講いただける状況だった。またポスターセッションは2日目夕刻に会場を広く使って実施され、一般78件、ポストデッドライン5件の全83件の発表があり、ドリンク付きのためか最高の賑わいであった。

基調講演は、本年3月に閣議決定された第3期科学技術基本計画で国家基幹技術のひとつとしての次世代超高速計算機について、「次世代スパコン用光インターコネクション」と題する講演を小林功郎氏(東工大)に、また、日本の産学連携の成功例である高速OCT技術を中心に、「メディカルフォトリニクス」の進展を谷田貝豊彦氏(筑波大)にお願いした。それぞれ国際的優位性を誇れる主題であり、興味深い話を聞くことができた。

さらに、中国、台湾、韓国との国際シンポジウムを今回初めて実現し、アジア近隣諸国で基礎から応用まで光技術の第一線で活躍の下記4名の先生方をお招きした。

① Qihuang Gong (Peking University, China): “Femto-second laser spectroscopy and applications”, ② C. C. Yang (National Taiwan University, Taiwan): “Medical diagnosis using optical coherence tomography”, ③ Yong

Hee Lee (KAIST, Korea/IEEE Distinguished Lecturer): “Vertical cavity surface emitting lasers with photonic crystal structure”, ④ Byoung Yoon Kim (KAIST, Korea/IEEE Fellow, ICO Vice-President): “WDM-PON technology for fiber-to-the-home”. この東アジア国際シンポジウムが、今後、例えば<sup>オプティクス</sup>OPSA (Optics & Photonics Society of Asia) と呼ばれるようなアジアの新しい光の科学技術フォーラムとしてスタートし、新しいイノベーションのきっかけを生み、協調と競争の活気溢れる交流の場として成長することを期待したい。

今回、分光学会との共催の具体的な形として2学会の合同シンポジウム「分光学と光学の融合と協調」、および日本分光学会極端紫外分光部会と日本光学会との合同企画シンポジウム「EUVリソグラフィ技術の進展」が開催された。ダイナミックに変化する研究動向の中で近接する分野の学会が協力し、関連する分野の研究者がひとつの場集って議論したことにより、多くの参加者が新たな研究の進展や研究活動の効率化の可能性を実感したと思う。また、日本眼科学学会と日本光学会との合同企画シンポジウム「最近の眼科測定装置」では4件の講演で、光学を応用した眼科医学分野における計測の最先端のトピックスが紹介された。

もうひとつの新しい試みとして、セラミックスレーザの国際会議であるLCS 2006の前半部分がOPJ 2006の中で「セラミックスレーザ国際シンポジウム」として最終日に開催された。後半部分は翌日に電気通信大学で行われた。近年進展の著しい分野で、海外からの多数の参加もあって活発な議論が行われた。

日本光学会の研究グループの企画するシンポジウムも2つ開催された。生体医用光学研究グループが同グループの研究会も兼ねて企画した「光学技術の先端医療への展開」では、医療現場に近い話題で4件の講演があった。近年の



図1 初の分光学会との共催。



図2 広がったポスター発表会場。

生体医用光学分野における研究者人口の急増を反映して、参加者も多く盛況であった。また、ナノオプティクス研究グループの企画による「ナノ領域の光科学技術の展開」では、近接場光の応用分野の広がりを示すさまざまな話題に関して紹介された。

このほかに、2003年に発足した日本光学会産学官連携委員会が企画したシンポジウム「日本光学会における“場”の変革について考えよう—21世紀型の知的創造にむけて—」が行われた。基礎研究から応用技術開発、産業化を効果的に進めるための仕組みや広い意味での環境づくりが話題とされ、産学官の連携や協調のあり方についての事例や今後の課題等について議論された。

プログラム委員会の企画による「量子情報通信技術の進展」は、従来日本光学会では若干手薄であった分野をあえて取り上げたものである。この分野をリードしてこられた講師の方々に、基礎的な概念の説明から先進的な研究まで幅広くご講演いただいた。若手を含む60名近い参加者が熱心に聴講する姿がみられたが、量子情報と従来の光学分野との交流・融合につながっていくことを期待したい。

若手研究者を対象としたOptics and Photonics Japan ベストプレゼンテーション賞(OPJBP賞)の表彰が、昨年に引き続き今回も実施された。今年はOPJBP賞応募講演も一般講演と区別なく通常のプログラムの中に組み込む形で実施され、最終日の選考委員会における厳正な審議により6件が表彰された。詳細は別途紹介されるので、ご参照願いたい。また、日本光学会奨励賞の授与式と受賞記念

講演、光設計研究グループによる光設計賞授与式と受賞記念講演も、例年通り行われた。

また、新たな試みとして、プレセミナーと、昼食を摂りながら聴講できる展示会出展社によるランチョンセミナーを実施した。基礎的な光学を第一線の先生方から講義していただく「チュートリアルセミナー」と、現在ホットなテーマについて理解を深めていただくことを目的とした「フォトリックナノ構造の設計と応用展開」の2つのプレセミナーでは、短い準備期間ではあったが58名の方に参加いただき、好評をいただいた。ランチョンセミナーでも、昼休みを有効利用しようとする多くの聴講者が各会場に集まり、満足いただけたものと思う。これらの企画が次年度以降も発展して継続され、参加者の満足度向上に繋がれば幸いである。

今回は、7名の推進委員会のリーダーシップで、実行委員会、プログラム委員会、そして組織委員会が、日本光学会幹事会や分光学会理事会と調整をとりながら運営を進めた。関係各位の多大なご尽力により、昨年に続いて851名と大変多くの方に参加いただいた。次回のOPJ 2007は大阪を会場として、笹木組織委員長のもとで運営される予定である。ますますの充実した講演会になることを期待する。

末筆になりましたが、会員の皆様方をはじめ関係各位のご支援のお陰でOPJ 2006が無事に盛況で開催できたことに改めて感謝申し上げます。